

2022年9月16日

東欧社会主義の歴史と現実

ハンガリー動乱を惹き起こした20世紀社会主義

盛田 常夫

拙著『体制転換の政治経済社会学』（日本評論社、2020年）

第8章 体制転換の歴史学－20世紀社会主義を再考する

第9章 20世紀社会主義と体制転換を総括する

第8章はハンガリー動乱を招いた戦後ハンガリー社会主義政権の確立過程を辿り、それがハンガリー動乱勃発を招いた歴史過程を明らかにしたものの。ソ連型社会主義の東欧諸国への導入がいかなる犠牲を伴ったかを明らかにした。

第9章は中欧諸国における体制転換と東欧社会主義を総括したものの。

20世紀社会主義は戦 時社会主義を超える ことはなかった

1. 戦時社会主義の特徴

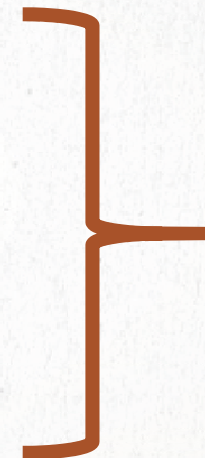
2. 20世紀社会主義：
5つの命題

戦時社会主義を特徴づけたのは、以下のような特性である

1. 労働者階級独裁（共産党独裁）

2. 個人崇拝的専制政治

3. 政治・保安警察による体制批判者の
監視と弾圧



政治的特徴

4. 戦時配給制度（計画経済）

5. 私的経済活動の禁止（私的所有の禁止）

経済的特徴

6. イデオロギーによる国家統一
（マルクス主義理論を絶対化）

7. 対外的鎖国政策
（資本主義世界からの影響力を断つ）

思想的特徴

結局のところ、20世紀社会主義は何だったのか

結論1 啓蒙的「賢人」支配

20世紀社会主義は啓蒙君主制を引き継いだ「善意の専制支配」であり、「賢人支配」であった。この支配体制は支配者と被支配者との格差（あらゆる意味における）を前提とするものである。

王制であれ、世俗の王制であれ、専制支配は支配者と民との格差を前提とする封建的支配体制である。与える者と受け取る者が明確に区別された社会であり、give but obeyの原則が貫徹する社会である。

結論2 世俗の王制への必然性

「善意の専制」であれ、専制政治は個人独裁や個人崇拜を誘発する。

世俗の専制は支配を確実にするために、「世俗の王」を必要とする。

専制者が「世俗の王」になることによって、支配の永続性が保障される。

結論3 啓蒙君主制の母斑を孕む歴史的存在

啓蒙君主制の否定の上に樹立された20世紀社会主義は、支配を安定させるために、労働者階級の党による独裁を必然化させ、一党独裁はやがて「世俗の王」として共産党書記長を神格化させることになった。20世紀社会主義は**啓蒙君主制の母斑を孕む歴史的存在**を抜け出すことはなかった。

逆に、アジア的な社会主義は、欧州の社会主義が崩壊した後、家族的な専制や個人崇拜国家へと後退し、**社会主義イデオロギーとは無縁の封建的君主制**に近い存在へと先祖返りすることになった。

結論4 戦時社会主義は君主制から共和制への歴史過程に生じた特殊な社会形態

現在の人類社会は、依然として、封建的君主制から共和制への、長い歴史的過渡期にある。この過渡期中で、欧州とアジアの歴史的発展過程の違いが明確になっているだけでなく、それぞれの地域内部においても、歴史過渡期の地域的差異が明確になっている。

それはまた、たんに国や地域間の違いのみならず、一つの国家内部、一つの社会内部における違いとしても発現している。

結論5 封建制から共和制への移行規範

人類社会は支配－従属関係を伴う give but obeyが支配する時代から、社会構成員の平等性を伴う give and takeが支配する時代への長期の過渡期にいる。

相互の利益を尊重し、相互の存在を認め合う社会が実現するためには、「交換関係にもとづく社会行動」が貫徹しなければならない。社会行動（日常生活、経済活動、政治活動、芸術活動）における互惠尊重の実現が、人類生き残りのための唯一の道である。

ハンガリー動乱を惹 き起こしたソ連支配

1. ライク外相処刑事件の
歴史的意味と真相

2. ライク処刑後のラーコ
シ独裁体制の確立

1. ライク外相処刑事件の歴史的意味 と処刑の真相

戦後のハンガリー共産党指導部

ソ連帰りのユ
ダヤ人政治家



ラーコシ
党書記長



ゲルー
経済担当



ファルカシュ
政治担当



レーヴァイ
イデオロギー担当



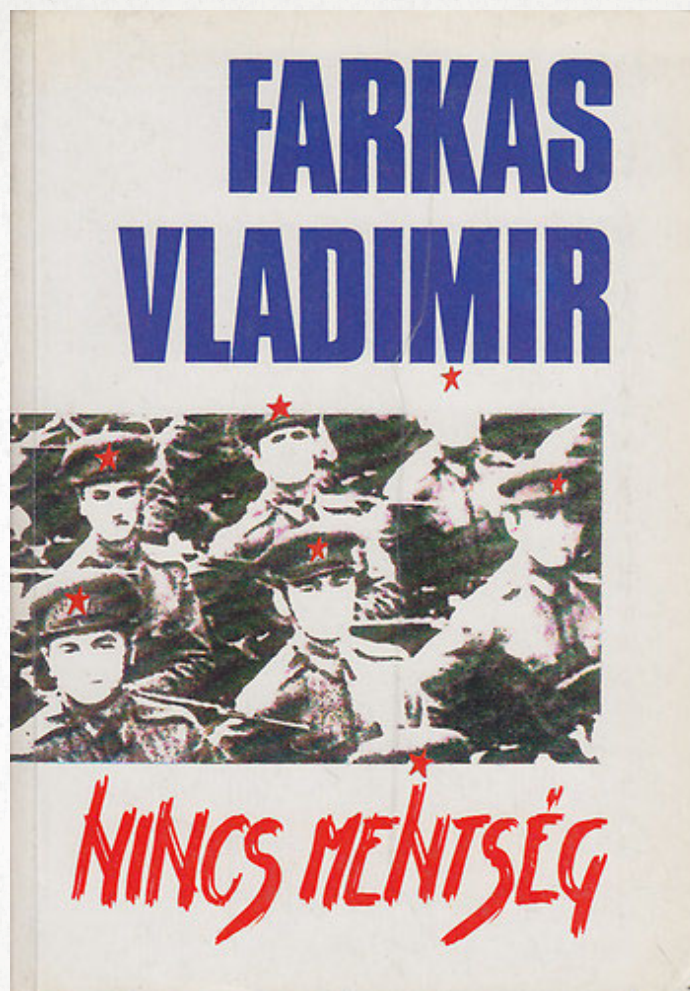
ピーテル
国家保安庁長官

国内組の政治家
ライクとカーダール



ファルカシュの息子ヴラジミール
国家保安庁技術者・諜報局次長

Farkas Mihályの息子
Vladimirによる
オラルヒストリー



1990年発刊

ヴラジミールは保安警察の盗聴技術者として、ほとんどすべての重要事件の現場に居合わせた。



ライク粛清の後に独裁体制を確立したラーコシ

1949年10月15日 ライク他絞首刑

1949年11月27日 コミンフォルム第4回大会
(マトラ山ガヤテウー)

1949年12月21日
スターリン生誕70年記念式典
(オペラハウス)

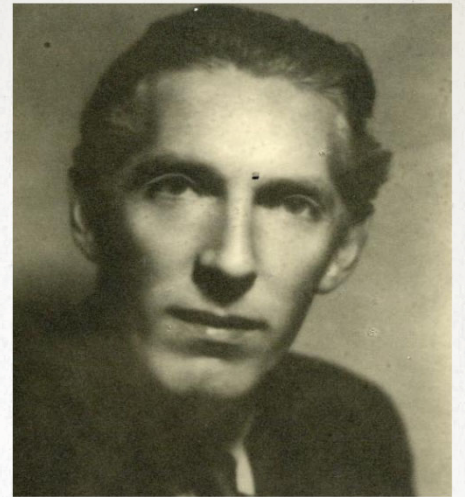
1950年1月1日 アンドラーシ通り
がスターリン通りに、アルパード
橋はスターリン端に改名

1950年メーデー



東欧粛清事件（1948－1953年）は NOEL H. FIELD拉致から始まった

1949年5月11日 チェコスロヴァキア諜報部の誘いでプラハ・パレスホテル滞在中のNoel H. Fieldが、車でハンガリー国境近くまで案内され、そこでハンガリーの治安警察に引き渡された。クロロホルムを嗅がされたフィールドはその日にブダペストまで連行され、ブダ丘陵にある保安警察の秘密の館に拘留され、尋問を受けた。



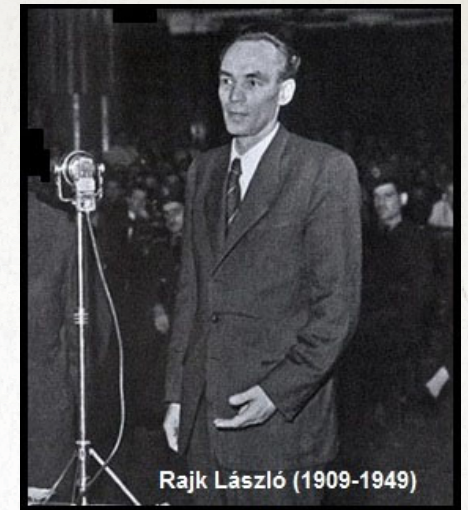
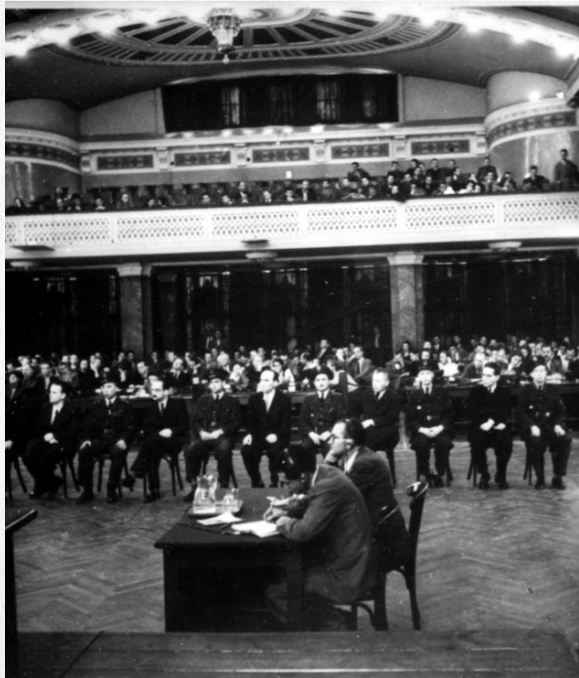
フィールドは戦時中、スイスを拠点に、ユニタリアンの活動家として亡命共産党員の面倒を見ており、共産主義者活動家の中では良く知られた人物だった。ハンガリーの治安当局は、フィールドをアメリカのスパイと見立て、フィールドから共産党に侵入したスパイ情報を得られると考えた。

保安警察の取調官は、フィールドが交友関係にあった各国共産党の活動家の指名をリストアップさせられた。ラーコシはおよそ500名に上るリストをスターリンだけでなく、東欧の各国共産党の書記長に送付した。

各国の諜報機関はハンガリーに取調官を派遣し、独自にフィールドを取り調べた。チェコスロヴァキア共産党書記長スランスキー粛清でも、フィールド調書が利用された。

1953年12月、ポーランドの諜報部幹部で、フィールドと取調べを行ったSwiatlo（シュフィアトヴォ）がベルリン出張時に亡命し、フィールド事件の全容が公になった。

拷問の中で、共産党活動家や政治家の写真を見せられ、関係のあった人物を告げるように指示された。その中に、ハンガリーの現職外務大臣ライクの写真を紛れ込ませ、「見たことがある」という供述をとったのである。ライクは5月30日、チェスゲームへ誘ったカードールによって逮捕された



これによって、ライクはハンガリー共産党に忍び込んだアメリカ帝国主義とユーゴスラヴィア修正主義の元締めという濡れ衣を着せられ、裁判にかけられることになった。9月初めに始まった裁判は9月24日に結審し、絞首刑が宣告された。10月15日に絞首刑が実行された。



ラーコシ夫人はヤクート人。モスクワで検事を務めていた時に、ラーコシと出会う。

ラーコシとゲルーは常に共に



ラーコシとライクの会食風景



ラーコシ独裁樹立以前は、ライクはラーコシより人気のある政治家だった。



ライクと同時に処刑された「首謀者」の遺体4体はブダペストから30kmほど離れた町グドゥルーの森に掘られた穴に無造作に埋められた。処刑された交換の夫人たちは夫がどこ埋葬されたか知らされなかった。



ライク夫人は共犯者として収監され、1歳に満たない幼児は、姓名を変えられて、党の児童施設に預けられた。



刑期を満了した夫人は改名を強制されたがこれを拒否し、ラーコシがソ連へ亡命した後、ライク外相の完全名誉回復を求め、遺体発掘に立ち会った（1956年9月27日）。



党は少人数での再埋葬式を計画していたが、夫人とその周辺の活動家はこれを拒否し、公開の再埋葬式を要求した。1956年10月6日に公開の埋葬式が行われることになり、10万とも言われる人々が参列する大規模な集会になった。



2. ライク処刑後の ラーコン独裁体制の確立

人民民主主義革命の現実：社会民主党指導者の粛清

1950年4月 サカシッチ最高会議議長（社会民主党幹部）逮捕

1950年7－8月 マロシャン軽工業大臣、リース法務大臣逮捕

1950年9月 リース（社会民主党）法務大臣拷問死



1948年6月 社会民主党と
共産党が合同



国家保安庁内部の粛清

1950年9月 国家保安庁副長官Szűcs Ernő逮捕
11月 拷問死



共産党内部の粛清：国内組でスペイン内戦に参加し、 コミンテルンの指導に従わなかった者

1950年末から1951年にかけて、ドナーと・フェレンツ、ハラスティ・シャンドールなどの古参の共産党員（国内組）の逮捕が相次いだ。

1951年春から、チェコスロヴァキアでは、共産党員の政府高官逮捕が相次いだ。スペイン内戦に参加し、フィールドとコンタクトのあった人物が逮捕された。

1951年4月21日 国内組の共産党指導者カーダールを逮捕。ピーテル・ガーボル保安局長がカーダールを連行。この時の取調官が、ファルカシュ・ミハーイの息子のヴラジミールだった。この時のカーダールの屈辱が、後に、ファルカシュ父子への憎悪を掻き立て、ハンガリー動乱後にファルカシュ父子断罪となる。

1951年7月14日 ソ連国家保安大臣アバクモフ逮捕、10月に東欧指導者の粛清を実行したアバクモフ配下のベルキン逮捕。これによって、チェコスロヴァキアのスランスキー裁判が大幅に遅れた。

1951年9月 チェコスロヴァキア共産党書記長スランスキー逮捕。ソ連内部の権力闘争の激化によって、スランスキー裁判が大幅に遅れる。

政敵を抹殺したラーコシは、自らの生誕60年を祝う祝賀会を組織し、1951年秋から全土を挙げた祝賀行事を開催して、独裁体制を確固とした。

スターリンのソ連型社会主義を模した社会主義ファシズム以外の何物でもなかった



スターリン生誕70年記念式典を真似た
ラーコシ生誕60年の記念式典
(1952年3月8日)



1952年3月 オペラハウス

ラーコシ生誕60年記念式典招待状



東欧の小スターリン

Gheorghe Gheorghiu-Dej
ルーマニア共産党書記長

Vlko Cservedkov
ブルガリア共産党書記長



Pártelit. Balról a második Hegedüs András, az ötödik **Gheorghe Gheorghiu-Dej**, a Román Kommunista Párt főtitkára, a hatodik Gerő Ernő, mellette/mögötte Apró Antal, középen Rákosi Mátyás, mögötte Hidas István, a hölgy Rákosi Mátyás felesége, előtte **Vlko Cservedkov**, a Bolgár Kommunista Párt főtitkára, miniszterelnök, jobbról a hatodik Emil Bodnăraș, román hadseregtábornok.

1953年1月2日(1952月3月8日??) Photo:Fortepan — ID 26074

1952年はラーコシ個人崇拝が頂点に達した年で 年末から新たな粛清の嵐が始まった

ライク裁判をまねたスランスキー裁判が11月20日に始まり、8日で結審した。1952年12月3日、スランスキー書記長他10名が絞首刑にされた。

1953年1月2日、ベリアからスターリンの伝令が届いた。「（アバクモフ配下の）ベルキンがアメリカのスパイであったことを自供しただけでなく、ハンガリーのピーテル・ガーボル保安庁長官をアメリカの諜報機関に組織した」と記されていた。ラーコシは1月3日にピーテル・ガーボルを私邸に招き、逮捕したのである。すでにピーテルの妻ヨラーン（ラーコシ秘書）が地下室に拘束されていた。





ここから国家保安庁のユダヤ系の取調官が一斉に逮捕された。

しかし、その2か月後に、スターリンの死が発表され、ラーコシは絶対的な後ろ盾を失ったのである。ここからラーコシ独裁体制が崩れ始め、ラーコシによって逮捕された面々は、ラーコシ体制の犠牲者だと自らを擁護し、ライク粛清から始まる種々の粛清事件へのかかわりを否定することになる。

ラーコシの粛清対象にならなかったファルカシュ父子が、ラーコシ体制の政治責任を問われることになり、粛清事件の責任追及はファルカシュ父子に向けられることになった。



ラーコシ独裁体制は頂点を迎えた時に、大きく反転する。1953年3月5日、スターリンの死によって、「東欧の小スターリン、スターリンのもっとも忠実な弟子」であるラーコシは後ろ盾を失い、党内の立場が急速に弱体化した。

ソ連共産党第20回大会（1956年2月）におけるフルシチョフ秘密報告によって、スターリン体制が断罪を受け、1956年7月、ラーコシはソ連への「療養（亡命）」を決断する。

ライク再埋葬式を経て、大衆の示威行動が活性化し、それが10月のハンガリー動乱を生んだ。

ハンガリー動乱における ソ連共産党の逡巡と決断

1. 動乱勃発の経緯（省略）

2. ソ連介入の経緯

3. ソ連共産党の逡巡と決断

2. ソ連介入の経緯

－いかなる名目で、誰がどのように介入を決定したのか

ライク再埋葬式以後、大衆的示威行動が一挙に活発化した

10月23日 ポーランドの労働者蜂起に呼応して、学生集団がポーランドとの友好の省庁であるベム広場に集結した。労働者集団の一部は英雄広場に建立されたスターリン像を打ち壊し、ブラハルイザ広場にトラックで運んだ。



16項目の要求の放送を求めて、ブローディ・シャンドール通りにあるハンガリーラジオに向かった一団はラジオ局内部からの発砲にあった。



ラーコシ後のハンガリー共産党（勤労者党）の書記長となったゲルーとカードール党の指導部は、国内情勢が緊迫度を増していたにもかかわらず、10月15日から1週間にわたって、ユーゴスラヴィア共産主義者同盟との協議のためにベオグラードに滞在していた。23日にブダペストに戻った一行は、市内が騒乱状態にあることに驚き、ソ連の助けを求めたのである。

当時の経緯の詳しいことは分からないが、当初、ゲルーはソ連大使館に武力介入を求め、アンドロポフはハンガリー駐留ソ連軍司令官に舞台移動を要請したが、本国の最高機関の決定なしには動けないと回答した。そこでアンドロポフは本国に打電し、フルシチョフはゲルーにたいして、正式要請を文書で送ることを求めた。ただ、ゲルーの要請が到着する前に、ソ連共産党幹部会で事態を協議し、駐留軍の展開を決定した。この決定にもとづき、24日未明にソ連駐留軍がブダペスト市内に展開することになった。

ただし、全会一致が原則の幹部会で、ミコヤンは反対の態度を変えなかった。ミコヤンは第二次介入でも反対の態度をとり続けた。

ソ連はこの年の夏前から、ポーランドとハンガリー情勢の流動化に対応するために、軍隊の派遣のシミュレーションを行っていた。フルシチョフは東欧流動化の責任を追及されるのを避けるために、強硬姿勢を余儀なくされていた。当初はポーランド情勢がより深刻だと思っていたが、ハンガリー情勢が急展開したために、ハンガリー平定に動くことになった。

ポーランドがゴムルカ復帰で大衆運動の高まりを抑えられたのにたいし、ハンガリーはラーコシの片腕だったゲルーを擁立したために、大衆の不満を抑えることができなかった。これがポーランドとハンガリーへのソ連の対応の違いを生んだ。

3. ソ連共産党の逡巡と決断

ソ連共産党サイドの事情

スターリンの死後、共産党幹部会（政治局）内の権力闘争が始まった。保守派は行きすぎたスターリン批判が東欧衛星諸国の不安定化をもたらしており、フルシチョフ失脚の機会を狙っていた。

1956年党大会「秘密報告」の後、東欧諸国の不安定化は顕在化し、権力争いが激化した。とくにポーランド情勢への対処は第一義的課題で、フルシチョフは軍事的介入を躊躇しないという姿勢を示して、保守派との権力争いを乗りきろうとしていた。また、中国共産党は欧州における社会主義国の分裂が、世界の共産主義運動に致命的な打撃を与えるとして、仲介の役に名乗りを上げ、1956年10月中旬にモスクワに劉少奇を代表とする代表団を派遣していた。

ポーランドはゴムルカを再登場させて国内の不満を和らげ、ソ連共産党との協議で、国内情勢を落ち着かせることに成功した。ソ連は軍を国境近くまで移動させたが、軍事介入は大きなリスクを伴うため、ポーランド側の安定化努力に賭けることになった。

ハンガリー社会主義勤労者党の状況

ソ連共産党はラーコシ失脚後の指導者の選定を誤った。当初、カーダールを好ましいとしていたソ連共産党は、ハンガリー側の決定を尊重する姿勢を示し、ハンガリーの党はラーコシの片腕だったゲルーを選び、ソ連共産党はこれを了解した。

ポーランドと同様に、改革派のナジをトップに据えれば、民衆の不満を抑えることができたかもしれない。しかし、危機感に欠けるハンガリーの党指導部はナジを選ぶ器量を持っていなかった。連綿と続いたソ連帰りの指導者に依存する態勢から抜け出すことができなかった。それが動乱を勃発させた大きな原因の一つである。

カーダールを含め、党指導部の危機意識の低さは統治能力の欠如の現れである。スターリン批判以後の国内情勢の安定化に取り組む危機感や能力に著しく欠けていた。

第一次介入から第二次介入決定にいたる1週間 ー ソ連共産党指導部の逡巡と決断

10月24日未明のハンガリーへの軍事侵攻の後、ソ連共産党幹部会では激しい議論が戦わされた。ハンガリーの派遣されたミコヤンは23日の幹部会決定に反対しており、26日の幹部会では保守派がミコヤン批判を強め、フルシチョフ追い落としを画策した。

中国共産党は、共産党間の対等関係を主張して、ハンガリー介入に反対し、さらにはソ連軍の他国への駐留にも反対した。少なくとも10月30日の午前の会談に至るまで、中国共産党はこの態度を貫き、中東欧諸国からのソ連軍の撤退を明確にするよう、ワルシャワ条約機構の会議開催を提案した。

ソ連共産党は、中国の強硬な姿勢に押されて、ハンガリーからの軍の撤退を視野に入れた合意を結んだ。実際、ソ連軍は駐屯地に戻り、市内からは戦車が消えた。しかし、この後に、事態の大きな転換を迎える。

10月30日夜、フルシチョフは幹部会の後、中国代表団と会談し、最新の情勢について話し合った。話し合いの焦点は次の2点だった。

一つは10月29日の共和国広場における国家保安警察官のリンチ殺害事件であり、もう一つは10月30日のナジ首相のワルシャワ機構からの脱退宣言である。

この二つの事件はハンガリーの統治能力の欠如を示すものだと捉えられ、このまま軍を撤退させれば、ハンガリーは社会主義圏から離脱するという見通しで、ソ連共産党と中国共産党の認識は一致した。これでフルシチョフの腹は固まった。

10月31日午前のソ連共産党幹部会で、フルシチョフは軍事的制圧を行うことを決め、11月1日から周辺国への説明行脚に出かけることを決めた。11月1日、ハンガリーから戻ったミコヤンはフルシチョフに対して激しく抵抗したが、フルシチョフはマレンコフを従えて、行脚の旅に出かけた。

11月4日未明、ソ連軍はハンガリー全土を制圧する軍事行動に出た。3日前にハンガリーから連行されたカーダールは、傀儡政権の首班として、ソ連軍と共にハンガリーへ戻ったのである。

いくつかの重要な事実

1. 社会主義体制を守るというイデオロギー的かつ実利的利害関係が、ハンガリーの運命を決めた。
2. 曲がりなりにも、各国共産党や集团的討議を経て、ハンガリー制圧が決定された。
3. ソ連の軍事侵攻を免れたポーランドは、1970年代から経済的危機に陥り、1980年代初頭の「連帯」運動を惹き起こし、再びソ連の軍事介入危機を招いた。1989年には反政府勢力と政府との「円卓会議」が開催され、体制転換へと踏み出した。
4. カードール政権の安定化は経済改革の機運を盛り上げたが、1968年改革はほとんど成果を上げず、長期の停滞が続いた。1988年のカードール引退によって、国内情勢は流動化し、ついには1989年の体制転換を迎えた。
5. こうして20世紀の戦時社会主義は平時の改革を実現することなく、崩壊の道を辿った。

20世紀の社会主義体制は、人類が君主制から共和制への長期の歴史的過程における帝国間の戦争の時代に生まれた社会体制である。「発展の可能性」を体制内に秘めた自立的な社会構成体ではなく、発展契機をもたず、限りなく退化する「自立的社会構成体」としての機能が欠如した社会であった。

一言で言えば、「人類が君主制から共和制へ移行する長期の歴史過程の中に一時的に出現した過渡的な社会構成体」であり、戦時社会主義とも呼べる社会体制であった。